#316

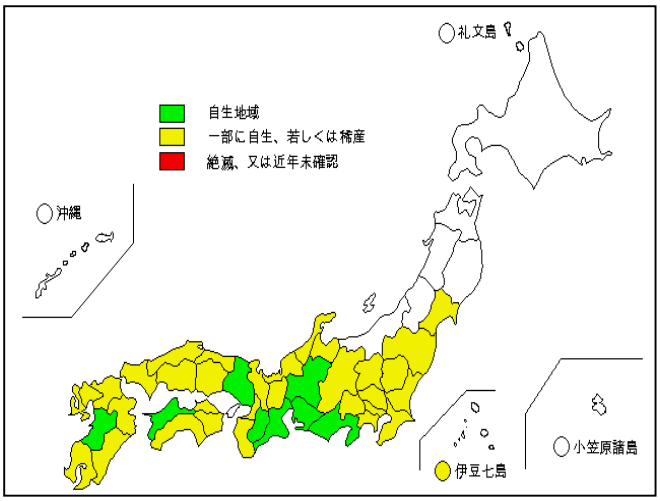
ムギラン

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

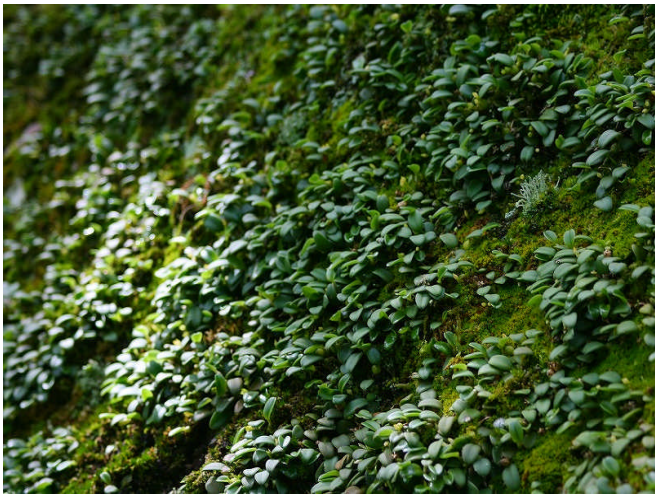
Bulbophyllum inconspicuum

ムギラン(愛知県東栄町　08.5/19)

宮城県以南に自生する小型の着生蘭です。渓流沿いの岸壁や樹木に密集して着生します。5～6月に開花しますが、2mmほどの緑色で非常に地味で小さく全く目立ちません。近づいてよく見ると、バルボフィラム属独特の船型の花をしております。まんまるのバルブと葉は合わせても1～2cm程度ですが、よく見るとカトレアのようにしっかりとした姿をしています。成長は非常に遅く、最新のバルブから1年に一つだけ新芽が出て新たなバルブを形成します。下の画像のように、大きな岸壁にびっしりと張り付くまでの大群落になるには何百年もの月日が掛かっているはずです。葉は5～10年は持ち、バルブは10年以上持つためどんどん連なっていきます。日当たりの良いところではころころとした締まった姿に、日陰では大きく間延びした姿になります。



寒冷地を除く全国の冷涼な山地に自生します。



岸壁の大群落(愛知県新城市09.05/23)

渓流沿いの大きな岸壁ではセッコクやウチョウラン、マメヅタラン、イワヒバ、岩タバコなどと一緒に着生している姿を目にします。樹木は梅や桜、ヒノキを好みますが特に樹種は選ばないようです。ヨウラクランやカヤランと一緒に着生していることも多いです。冬場は葉から水分が抜け、ややしわしわになって越冬します。遠目にはマメヅタランにも似ていますが、バルブがあるのですぐに分かります。近縁種のミヤマムギランは一回り大型で、本種よりも暖地に自生し花は濃紅色で、バルブに対し葉は5倍ほど長く先端が鋭い、また、バルブに縦に筋が入る、ムギランよりも葉が薄いなど違いが明白なので容易に判断できます。本種よりもこのミヤマムギランのほうが一般的に観賞価値が高く、斑入りなどの葉芸物は「剣蘭」と呼ばれコレクターも多く古くから栽培されています。

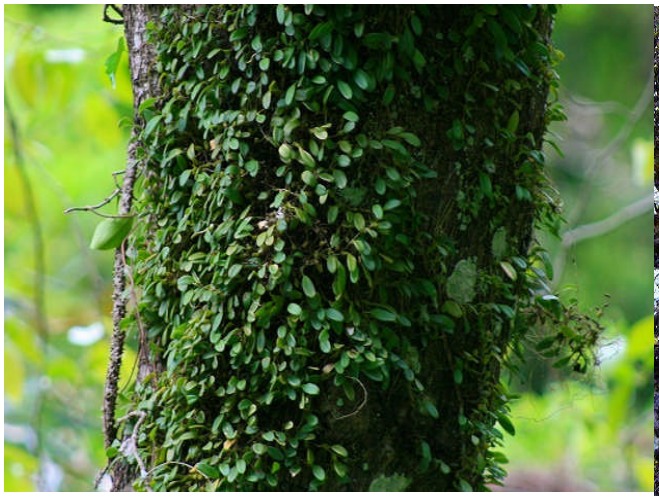
Document and photo by LittleFlower 2009

ムギランの花(愛知県新城市09.05/23)

渓谷沿いの立ち木(静岡県佐久間町09.05/23)

当地中部地方では着生蘭の中では比較的発見できるほうですが、他のラン科植物の例に漏れず減少著しく、国及び多くの都道府県で絶滅危惧種に指定されています。護岸工事やダム、道路工事、森林伐採による減少が主ですが、かわいらしい草姿は山野草愛好家だけでなく盆栽の下草としても好まれるため、盗掘も減少の要因になっています。両種とも栽培自体はそれほど困難ではありませんが、成長が極めて遅いことから一般物の流通品は100%盗掘です。実生増殖、バルブ吹かし共に可能ですが絶対に採算が取れないため商用増殖は今後も期待できないので、いかに現存する自生地を残せるかに絶滅の回避がかかっています。

冬場の姿(愛知県東栄町08.04/1)



立ち木の大群落(愛知県東栄町09.05/23)

岸壁の群落(愛知県東栄町08.05/19)

09.7.3作成

Document and photo by LittleFlower 2009